Ｂ－１　指導上の工夫　詳細

①　子どものよさを生かす題材の設定

ア　子どもの実態の把握

題材を設定するにあたり、まず、子ども達一人一人が現在身に付けている技術と課題への取り組みの意欲などの実態と子ども達同士の人間関係をつかむことから始めた。文章・言葉・絵・工作・歌といった思いを表現する場は多々あるが、自分の考えを持つことがなかなか難しい子、表現することに自信が持てない子、思いを持っているが表現する技術や方法を知らずにもどかしい思いをしている子がいる。また、はさみ・のり・定規・コンパス・絵の具などの道具の使い方についても、うまく使えない子がいる。基本的な操作ができるかどうか個々の実態を把握し、できていない子には十分に支援し、より高度な使い方や多様な使い方を学習できるようにしている。

イ　豊かな題材の設定

子ども達一人一人の興味を引き出し、やってみたいという気持ちがかきたてられ、その子が持っている資質や能力を十分に働かせることができる題材の設定が大切である。

『めざせ！ローラーの達人！』では、子どもたちにとってローラーが今まで試したことのない道具であることから、興味をもって活動に入ることができると考えた。また、ローラーの転がし方には多様なバリエーションがあること、絵の具のつけ方・ローラー自体への細工の仕方によってローラーの可能性が広がっていくことが想定された。子ども達にとって、ローラーという道具を使うという活動がそのまま、表現の工夫を見つけ出すことにつながるものと考えられた。

②　発想を引き出し活用させる手だて

ア　造形遊び

子ども達にとってローラーを使って表現することが初めてであるという実態から、まずはローラーに絵の具をつけて、自分の思いのままにどんどん描いていく活動を設定した。ころころと道のように長く転がしてできる直線・曲線を楽しんだり、筆のように形を描いたりして、ローラーを転がすことによって生まれる跡のおもしろさを体験させていくことにした。そして、子ども達にローラーを転がす楽しさを十分に味わわせたいと考えた。

イ　参考作品の提示、どれどれタイム

導入時や手が止まっている時、「こんな模様がローラーでつくれたよ。どうやってつくったかあててごらん。」と教師が試作した作品を見せることにより、自分もつくってみたいという創作意欲をかきたてるようにした。また、製作途中に『どれどれタイム』をとって自由に友だちの作品を鑑賞したり、方法を教えてもらったりする時間を設定した。そして、やってみたいなと思った方法は、取り入れて生かすようにした。そうすることで友だちや教師の作品を模倣することを楽しみ、さらに「リズムよく転がそう」「強弱をつけて転がそう」「ＡとＢの色の組み合わせはどうだろう」など発想の広がりがみられると考えた。

ウ　言葉かけのタイミング、わざのネーミング

意欲を持って活動に取り組めるように『めざせ！ローラーの達人！』を合い言葉に、「ローラーのすごわざを発見しよう！」「ローラーのいろいろなわざを試してわざコレクションをつくろう！」「美しいローラーアートをつくろう！」と、時間ごとにわかりやすい言葉で課題を提示するようにした。活動中には「ローラーってこんなことができるのね。」「きれいだね。」「おもしろいね。」など共感的な言葉かけをすることを心がけた。

③ 知識や技能を習得するための手だて

ア　創作の広がりにつながる十分な材料と用具の準備

ローラーで表現することが初めてであるので、多数のローラー・多色の絵の具・多数の練り板・いろいろな大きさや色や材質の紙を準備し、材料置き場に並べておいた。製作途中、ローラーや練り板は絵の具のむだがないように、使い終わったら材料置き場にもどし、友だちが使った色で気に入った色があったら、材料置き場から持って行き使ってもよいことにした。そうすることで、友だちが作った色で、自分では作らないような美しい色に出会え、色の世界が広がるきっかけになった。

イ　用具の技術指導の工夫

「もっといろんなわざを知りたいな、できるようになりたいな。」という思いを持っていても用具を使った経験や技能が不足しているために、何をどうしたらいいのかわからない子がいる。そんな時は、その子の思いをそっと聞いてみて、思いにあった材料や絵の具、ローラーを提供し、時には手を取って一緒に活動するなどの支援をした。

どんどん活動が広がっている子に対しては、新しい技法のヒント作品を提示したり、新しい技法を紹介したりしてローラーの可能性を探求できるように支援した。

④ 評価の場面の工夫

ア　展開の過程における評価

少人数であることから、子ども達が活動している姿から関心・意欲を見取るようにした。一人一人をみつめ、真剣に取り組む姿をみんなに紹介したり、すばらしいわざを見つけている子の作品を紹介してわざを広めたり、わざの習得に意欲や進歩が見られる子にそっと称賛の言葉をささやいたり、子ども達の行動のいいところや作品のよさを見逃さないように心がけた。

イ　自己評価・相互評価

授業のまとめとして、自分の作品を紹介し、うまくいったことやうまくいかなかったことなど発表しあうようにした。友だちの発表を聞いた子からは、作品についていいなあと思ったことや「こうしたらいいよ」などのアドバイスがあったり、「きれいな模様なのでやってみたい」などわざの交換の場にもなったりした。自己評価については、毎時「ふりかえりカード」を書くことにより、本時の活動で児童が感じている思いや、できたことと次時への願いなどを把握し、次時の活動の参考にした。

⑤ 鑑賞の工夫

ア　交流しあう鑑賞の場の設定

『ローラーアート美術館鑑賞会』では、友だちの作品のよいところを積極的に見つける姿が見られた。また、友だちが自分の作品をどう評価してくれるか、子ども達はとても気になったようだ。